

平成 27 年度 卒業式式辞

卒業生の皆様、おめでとうございます。

ご家族の皆様、長い在学期間中には、いろいろなご苦勞がおありになったことと、お察しいたします。皆様の支えなしには、今日のこの日を迎えることはできなかったでしょう。心からお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

さて卒業生の皆さん。大学生として、あるいは大学院生として最後の日をむかえることになりました。これはあなた方の人生の、始まりの第一歩でもあります。人生とは経験を重ねることです。そして、一つの経験には必ず終りがあり、それはまた新しい経験の出発点でもあるのです。

新しい経験は、それを乗り越えるためのエネルギーを必要とします。新しいことを始めるには、緊張と恐怖を突き破らなければなりません。でも思い返してください。わたしたちは、生まれて育っていくあいだに、何度もその緊張と向きあい、恐怖を乗り越えてきているのです。みなさんも、この学校で十分その経験を重ねてきて、社会に出ても新しい経験を乗り越える力は、もう十分に培われています。

樹木の成長になぞらえてみましょう。

皆さんを拝見していると、若木のあふれるような生命力を感じます。堅い大地の下に埋もれた硬い種子に、水と栄養と暖かい太陽がふり注いで、やがて小さな芽が大地を突き破って伸び出してくるときの、あの喜びにあふれています。

新緑のふたばが黒い大地から姿を表し、やがて枝々に美しい果実を実らせるようになるでしょう。

これから皆さんが旅たとうとしている社会は、例えれば森のようなものです。私たちは、それぞれが、森を構成する一本いっぼんの木です。もし森の木々が、勝手に枝を伸ばしてそれぞれが、からみ合って鬱蒼と茂ったら、太陽も雨も地面に届かず、やがて森は滅んでしまいます。周囲の木々を思いやり、自分勝手な枝葉の伸ばし方を反省し、どの木も太陽を受けられる森、そんな社会を作っていかなければなりません。今、反省と申しましたが、反省の反という字は、自分をかえりみるという意味です。そり返って、かえりみなければいけないのです。そして、反省の省の文字は、やはり省みるという意味を持ちますが、省くという意味も持っています。自分と周囲をしっかりとかえりみて、我欲を省いていくことが大事なのです。日本の里山は、昔から美しい自然の息吹を伝えておりました。今、山に入る人が減り、山で生きる人がいなくなって、竹林も森も壊滅的な状態にあるそうです。森は常に再生していかなければいけません。森を再生させるには、自分の樹木の生育や実の付け方を調整し、木の形を整える、剪定という作業をかかしてはなりません。

東洋学園大学は、今年創立 90 年を迎えます。創立者宇田尚先生が 1926 年「東洋女子歯科医学専門学校」を建てられたのが始まりです。その教育の原点は、「自彊不息」です。自彊の彊は難しい文字ですが、これは勉強の強と同じ言葉なのです。中国の「易経」という書物の中にある言葉です。「自彊不息」とは、みずから努め、たゆまず励むという意味です。みずから努めるというのは、主

体的に学び続けるということです。

私はこの大学で教員生活を始めたとき「自彊不息」という言葉に出会い、それから易学の本を読みました。そして易学というのは、どうにもならない宿命を尋ねる学問ではなく、人間そのもの、人生そのものがいかに成り立っており、それをいかに変化させるかという実践の学問であることを知りました。

「易経」という書物の名前を聞いたことがない人でも、「易断」という言葉は聞いたことがあるでしょう。わたしたちは、未来を占ってもらって一喜一憂します。でも、この「易断」を避けがたい宿命と捉えるのは、世俗的な風習に過ぎません。運命はいくらでも変えることができるのです。本来「易」という言葉は、変わる、変えるという意味なのです。

易学によると、万物には陰と陽があります。その陰陽の相対的な無限の進歩向上が「中」であるということです。陰にも陽にも偏らない中央点にあって、永遠の進歩を続ける。この「中」がもっとも大切なものであると教えます。

老子も、この「中」の大切さをいいます。孔子では、この「中」が、中庸という考えになっています。面白いのは、古代ギリシャの哲学者アリストテレスが同じことを言っております。彼は徳の中心となる概念は、超過と不足の均整のとれたところ、つまり中庸である、といっています。中庸こそが、本当の真実、本質的な徳であるということです。若い頃、私はどうしてもこの言葉が理解できませんでした。中庸とは一体なんだろうと、ずっと心のなかに抱え込んでいました。

私は、東洋女子短期大学、そして東洋学園大学を通して、40年ほど演劇論の授業を教えてきました。演劇といえば、今から2500年以上前、ソフォクレスというギリシャ悲劇作家の書いた『アンチゴーネ』という作品が好きです。

アンチゴーネはオイデプス王の娘です。父親が死んだあと、アンチゴーネの二人の兄たちが後継者争いで激しく戦った挙句、ふたりとも死んでしまいます。そのとき、オイデプスの弟クレオンが国をおさめていたのですが、クレオンは攻め込んできた弟のほうの弔いを禁じます。弔ったものは死刑にするというお触れが出ます。

アンチゴーネは悩みます。彼女にとっては、ふたりとも身内です。なくなった人を弔うのは、神の定めた掟だと思ふのです。彼女はお触れに逆らって下の兄の弔いを実行し、そのため岩屋に捕らえられます。そして彼女は、「私は憎しみをわかちあうために生まれて来たのではないのです。愛をわかちあうためにこそ、生まれてきたのです」と言い残し、叔父クレオンを諭し教えるために自害して果てます。

クレオン王の国の秩序を守るための掟と、アンチゴーネの肉親への愛、神の掟との相容れない対立が生んだ悲劇です。

ギリシャ悲劇の主人公たちは、与えられた宿命を受け入れながら、敢然と自分の運命を切り開いていきます。彼女も背筋を伸ばして国王の権力に立ち向かい、理不尽な命令に殉教者のように向かいあいます。宿命の宿は、ヤド。つまり留まるところを指していますが、運命というのは命を運ぶものなのです。あくまでも動きのある、変化するものなのです。

『アンチゴーネ』を、大学2年の時に読んで感銘を受け、自分も権力の前で背すじを伸ばしても

のがいえる人間になりたいと思っていました。そして教師になり『アンチゴーネ』を学生たちに講義しているうち、この悲劇は回避することができなかつたのだろうか考えるようになりました。

度のすぎた主張を通そうとする二者の対立からは、破壊以外の何も生まれません。決定的に対立する立場が生み出す破壊のエネルギーの恐ろしさに二人が気づいて、それぞれの主張に固執しなかつたら、衝突の悲劇はおこらなかつたのではないかと考えるようになりました。こうして、私にも初めて中庸の大切さがわかりはじめたのです。

みなさんの中でも、東洋学園大学で学んだことが未消化のまま残されていることがあるかもしれませんが、時間をかけてそのことを考えてみてください。教養というものは、長い時間をかけて自分の中に取り入れていくものです。

世界はICT化が進み、世界中どこでもネットにつながり、世界全体の抱える問題の情報を瞬時に得ることができるようになりましたが、一部の人々はその情報に流され、自分を見失い、あるいは激しく自己主張し、力の競り合いをしています。今、人びとが憎みあう姿を見ていると、21世紀の文明が、はたしてどこに向かっているのか恐ろしくなります。しかし、自らを顧みて我欲を省くという考え方に従えば、この美しい地球は守られるはずです。相対立する者たちの考え方の違いと矛盾をしっかりと見つめ、世界の多様性を主体的に受け止めて、中庸の心を育てていただきたいと思います。

今こそ両足を踏ん張って立ち上がり、社会に羽ばたき、自分の両手で大切なものをつかみましょう。そのために学習してきたのだということを忘れないで下さい。ついでに言えば、学習の習は、羽の下に白と書きます。易学によれば、白は小鳥の胴体を表す象形文字です。ひな鳥が盛んに羽をバタバタさせている、巣立ちの情景が、学習の習なのです。学習というのは、何度も何度も飽きずにひとつのことを追求し続けることなのです。

みなさんは東洋学園大学での学びを通じて、十分羽ばたきの稽古はできております。私ども教職員は、みなさんの巣立ちを目指して今日まで心血を注いでまいりました。自信を持って、飛び立ってください。社会に出たら、様々な人にであうことでしょう。人を観察するとき、その人が何をやり遂げたかを見ることも大事ですが、それ以上に大事なことは、その人が何をやらないかを判断することです。

私が学生時代に夢中になって読んだニーチェは、その哲学書の中で、「よく考える人になりなさい」と言っております。彼は、よく考える人になるための三つの提案をしています。

一つ目は、人づき合いをしなさい。

二つ目は、本を読みなさい。

三つ目は、物事をやりとげる情熱を持ちつづけなさい。

1844年に生まれたニーチェは1900年になくなっていますが、彼は100年以上も前からコミュニケーションの大切さを説いているのです。よいコミュニケーションを実行するためには、自己をまず、確立することが大切であることは言うまでもありません。

さらにどんな本を読むかについて、ニーチェは古典を読むことを勧めています。古典というものが何世紀も前から読まれ続けているということは、その本に普遍的な真実があることをものがたっています。そして、ニーチェは「世界観が変わるような本。読む前と読んだ後で、自分の考え方が変わるような本を読みなさい」とも言います。そういう本にぶつかったら、一度で読み終えるのではなく、何度も何度も熟読することを私からもおすすめします。

そして、なにより大切なのは、やり遂げる情熱をもち続けることです。情熱さえ失わなければ、何度失敗しても挑戦し続けることができます。そしてついには、失敗が成功の母となる日が来るに違いありません。

今、あなた方は一つのことを成し遂げて、今日を迎えたということを忘れないで下さい。そして、颯爽と社会に飛び出そうというあなた方を前にして、在学中のあなたがたの学びに敬意を表しながら、私はあなた方一人ひとりに強い誇りを感じています。春の訪れの中で、これから花を咲かせようという硬い蕾のような皆さんの生命の躍動を感じます。

どうぞ、すばらしい人生行路を旅してください。みなさんの健康と幸せを心からお祈りして、私の式辞といたします。

平成 28 年 3 月 20 日 東洋学園大学学長 原田規梭子